

伝統を守りながら、 新しく活気あふれる新聞づくりの創造

●山形県鶴岡市立朝陽第三小学校教諭 佐藤ゆう子

半世紀も前から新聞教育を実践し、多くの成果を上げてきた山形県鶴岡市立朝陽第三小学校。最近も、第54・55回全国小・中学校・PTA新聞コンクールにおいて、内閣総理大臣賞を受賞しています。新聞教育を担当する佐藤ゆう子先生に、同校での新聞教育の内容や特徴などについてまとめていただきました。



●朝三新聞の伝統

本校は新聞教育の伝統校として、昭和32年に行われた第7回全国学校新聞コンクールで、第一等文部大臣奨励賞を受けて以来、内閣総理大臣賞をはじめ、数多くの全国表彰を受けてきた。

学校新聞だけでなく、全校を上げた新聞教育が行われており、1年生から学習のまとめとしての個人新聞の作成や、4年生以上では、全学級定期的に学級新聞を発行するなど、学年の発達段階に応じた新聞作りを行っている。

どんなつたない新聞でもよい。もし、それが担当の先生の手だけで作られるなら、一利あっても、児童のためにはならない。みせかけの学校だよりのだ。

これが本校新聞教育黎明期の諸先輩教師たちが、新聞教育を進める上で肝に銘じた言葉である。新聞作り

の主人公はあくまで子どもであり、子どもの視点、子どもの言葉を通じて、発行される新聞であるからこそ、その教育的意義がある。この思いは、今日に於いても、脈々と受け継がれている本校新聞教育の考え方である。

●伝統から学ぶ学校新聞

朝三新聞の特徴としてまずあげられるのが、読む人の事を考えた、きれいで読みやすい紙面構成と、読者を引きつける見出し、レタリングの工夫である。

本校には幸いなことに、40年を越える新聞教育の蓄積があり、良き手本となる学校新聞にあふれている。子どもたちは、先輩の残した新聞にあこがれを持っており、少しでもその新聞に迫ろうと、真似をしながら新聞の基本を学んでいる。読者を引き付けるレタリングの工夫や読みやすい割付の仕方、丁寧な仕上げ等の

新聞の基礎を知らず知らずのうちに体得していくのである。伝統として、読者を意識した、読みやすい新聞作りが引き継がれているのである。

●今日の社会情勢から

しかし、現在学校現場が置かれている状況は、週休2日制の導入や不審者対策による放課後の集団下校など、新聞作りのための時間確保が難しくなってきたのが現状である。

学校新聞の意義を再度検討し、伝統を大切にしながらも、時代にあった新しい新聞作りとは何か、本校における改革が始まった。

●学校生活の中で、 生きる朝三新聞となるために

学校新聞の果たす役割とは、子どもと教師が課題を共有し、一緒にがんばろうという問題提起を、子どもの視点、言葉を通してできるということがあげられる。また、子どもの

頑張り全校に広げ、その喜びを全校で分かち合うことも、学校新聞の大切な役割である。本校が今めざしている学校新聞とは、これらの学校新聞の特性を生かした、学級学年、学校経営の題材として「使える新聞」である。

●新鮮な話題をタイムリーに (5年生の新聞作り)

本校の新聞委員会は、5年生8名、6年生8名、計16名で構成されている。

5年生新聞班では、主に先輩の新聞に学ぶ新聞作りをしている。割付の仕方や、レタリングの仕方、見出しの付け方など、先輩の新聞をそのまま真似しながら、作り方を覚えていくのである。

また、5年生新聞班では、児童会で話題となっている問題を中心に、自分たちの問題をタイムリーに全校に知らせ、考えてもらうための新聞

朝三新聞第260号、1・2面
(平成18年度第2号)
5年生の新聞



作りを担当している。全児童に、自身自身の問題として考えてもらうには、新鮮でタイムリーな新聞の発行が必要である。速報性に重点を置くため、紙面構成を二面とし、見出しのレタリングについては、時間をかけないワープロによる作成としている。また、子どもの生活に根ざした「使える新聞」とするために、月2回の発行を行い、児童会活動の話

合いや、学級活動の際の話題提供の材料として利用されている。

●子どもの創造性を生かした新聞作り（6年生の新聞作り）

5年生の新聞では、基本的な新聞作りを学ぶことに重きを置いているため、依頼記事を中心とした構成としている。6年生になると、1年間の新聞作りの基礎から発展させ、学

校生活だけでなく、地域へも視野を広げた、取材と問題提起、意見文を中心とした紙面構成となり、より創造的な内容となっている。例えば、今年度の6年生新聞では、来年度学校創立百周年を迎えることをふまえ、学校のどんなことを知りたいか児童にアンケートをとり、記事内容を企画している。また、子どもの安全をおびやかす事件が多発していることを受け、地域でも保護者や町内

会による見守り隊が増えているが、「防犯」をキーワードに年間通して取材していく計画でいる。

三小の伝統であるレタリングの工夫も取り入れ、楽しみながら時間をかけ、学期2〜4回の発行を予定している。

●子どもための子どもの手による子どもの新聞作りを

自分たちの手で自分たちの学校をよくしていく、そして、それに携わるものだけがやるのではなく、みんなにもれなく本当のことを知らせ、みんなが自分のこととして考え、そのみんなの意見で学校をよくしていく。今、「朝三新聞」がめざしている新聞のスタイルである。

伝統を大切にするということは、同じやり方を守り続けることではなく、試行錯誤しながらもよりよいものをめざすことであり、それが伝統を磨くということになるのだと思う。

学校という共同社会におこった喜びや悲しみ、明るい意見を拾い出し、よりよい社会を作っていくこと、そして、子どもたちみんなの自主的な活動で、教師も子どもと共に、新しく活気あふれる学校新聞を育てるために一歩を進めていきたいものである。



朝三新聞第264号、1・2・3面
(平成18年度第6号)
6年生の新聞

